

SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

№13
2022.03



The sky's the limit. ～子どもたちが秘めている無限の可能性～

今号では、今年度4月より附属視覚特別支援学校長になられた星祐子先生にお話を伺います。

私は、附属視覚特別支援学校で教員、副校長として勤務した後、国立特別支援教育総合研究所で盲ろう教育やインクルーシブ教育システムに関する研究や業務に当たり、5年ぶりに学校に戻ってまいりました。研究所では、研究一筋の研究者だけではなく、私のように教育現場を知っている方、教育委員会から来られている方など、様々なバックグラウンドを持った研究者がおりました。その中で、これまでにない教育施策や研究といった視点で物事を見ながら毎日を過ごしました。また、様々な教育現場、機関を訪れることができましたので、他の学校での実践や地域の教育行政の取組を知ることができたのは、とてもプラスになりました。研究所で得た知見も踏まえて、今は学校現場でどのように課題に取り組むべきか、様々な機関と連携しながら学校経営を進めています。

先生が子どもたちと接していく上で大切にされていることは何ですか。

私が一番大事にしていることは、「子どもの可能性は無限大であり、その可能性を十分に引き出していくために、教員は子ども一人ひとりに何ができるかを子どもたちに常に寄り添いながら考える」です。私が出会った児童とのエピソードを2つご紹介します。重複学級に入学してきた、言葉も一語文、二語文で、オウム返しがあって、自閉的な傾向の強い



小学1年生のお子さんを担任しました。私は、会話はそれなりにできても、文字を書くのは難しいのかもしれない。でも文字は持たせたい。どうしたら文字を獲得させられるかと考えていました。その子が2年生になった時に、同学年の子が急に入院することになり、みんなでお手紙を書くことになりました。その子も書きたいと言い、早く学校に戻ってほしいという気持ちを込めて、入院した子の名字の一字目の「な」を頑張って書きました。その子が書いた初めての文字です。それを見て、その子にとっての意欲やきっかけは、ものすごく大きいものだと感じました。3年生になると、ひらがなを全部理解して書けるようになり、今でも私にお手紙をくれます。



もう1つは、重複学級で4人の児童が在籍するクラスを担当していた時の話です。4人と学習室で過ごした後、1人の児童だけ音楽室に送っていかなくてはならないので、他の全盲児童2人と弱視児童1人には私が戻ってくるまでここで待っていてと伝えました。その1人の児童を送った後に、3人の元に急ぐと、弱視児童が全盲の2人の手を取って、そして一番年上の全盲児が、「こっちだよ」と言いながら、



自分たちの教室に向かって廊下を歩いてきました。子どもたちで考えて、行動する姿に感動して、子どもってすごいなって考えさせられました。同時に、私は手をかけ過ぎていたと反省もしました。未だに忘れられない光景です。子どもの可能性は無限大。無限の可能性を引き出してあげることの大切さを子どもたちから学びました。

連携推進グループに対して一言お願いします。

私は3年間、グループの前身である特別支援教育研究センターに勤務しました。学校現場から離れた立場で学校を見ることができ、また学校は大学からどのように見えているのかといった広い視野を持つことができました。他の附属特別支援学校の先生方と共にセンターにいた年月はとても貴重で、学びが多く、いまだに連絡を取り合っています。

今の連携推進グループでは、教材・指導法データベースや書籍化など、見える形で活動されていて

素敵だと思います。引き続き、附属特別支援学校5校だけではなく附属学校群11校のつながり、大学との連携により、色んなことに挑戦して、今まで以上に附属学校としての教育活動を広く発信してほしいです。

* * * * *

おわりに

世界で活躍する日本人が多くなってきている昨今。昨年 MLB のロサンゼルス・エンゼルスの大谷翔平投手の活躍に対して、米メディアは“The sky's the limit.”と彼を称賛しました。「空は限界」ではなく「空には制限するものはない」という意味です。空はどこまでも高く、限度がありません。星先生のお話を伺いながら、可能性を信じて世界で羽ばたいている附属視覚特別支援学校の卒業生の方々を思い出し、この言葉が今号のタイトルにぴったりだと思いました。

（聞き手：佐藤北斗 / 敬称略）



附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取り組みがたくさんあります。

実践報告

色々な状況に自らの心身を対応させていける力を育みたい

～附属桐が丘特別支援学校 本校中学部「自立活動」の授業実践～

附属桐が丘特別支援学校は、肢体不自由の児童生徒が在籍しています。高橋先生は、本校の中高等部で自立活動を長く担当され、多くの生徒の指導に携わっています。卒業後の生活を見据えて、一人一人に丁寧に寄り添いながら指導をされている高橋先生の授業をのぞいてみました。

* * * * *



授業者：自立活動担当 高橋 佳菜子先生

プレイルームに、中学部の生徒1名が入ってきました。室内に入ると、絨毯の手前に車いすを止めて、自分で車いすのマジックテープを外して靴を脱ぎます。

時間がかかっていますが、先生はさりげなく見守りながらも手伝おうとはしません。この生徒は靴の着脱は一人で出来るため、安全を見守りますが、介助はしないことにしているとのことでした。



生徒が靴を脱ぎ、「お願いします。」と声をかけると、先生は生徒が自分の力で歩いて床に降りられるように背後から支えて生徒の歩行の様子を見ます。このとき、授業前の足の運び方はスムーズか、歩幅はどれ



くらいか、重心の移動はどうか等、生徒の状態を感じ取りながら把握していきます。先生は、「教員が必要な援助をしながらも、本人のできる力で動くことを考えています。トイレや教室での椅子への乗りかえ場面等の日常生活においても、本人の力を生かすことが必要と思っています。」と仰いました。

挨拶をした後に、先生が生徒の体調、今日の身体を感じ方等を確認します。

生徒は先生の支えを受けながら、床上で仰向けの姿勢で膝を動かす練習をしたり、横向きになって身体をひねる練習をしたりします。先生は生徒にそのときに感じたことを尋ねながら、進めています。膝を動かすときには、本人が膝をまっすぐ上げられるように援助をしています。先生と一緒に動いている途中で、内側に入ろうとする力が入ったり、うまく上げられなかったりすることがあります。そのとき、まっすぐに膝を上げられるように、自分で力の入れ具合を調整することを学習しています。



身体をひねる練習のときにも、先生は本人が自分で動かすことを大切にしながら、肩を開くように援助をしています。自分で肩を上手に動かすことができるようになることで、普段でも肩に力が入っていることに気付いて、ほぐしていく自己ケアの方法にもつながります。



* * * * *

授業の最後に、生徒が授業の前と後とで身体の状態が違うことに気づき、発表しました。

先生は、「生徒は現在中学生ですが、高校卒業後は、色々な状況の中で自らの心身を対応させていける力が必要になります。そのためには、自らの心身の状態に意識を向けて、身体の各部位の状態や正しい動かし方を知り、自分なりの基準を自分の中に持っておくことが大切だと思っています。」と話されました。生徒が自身の身体に気づくことが何よりも大切であり、「自己理解」へと結びつくことを改めて感じた授業でした。

（実践紹介者：5附属連絡会議委員・附属桐が丘特別支援学校 小泉清華／敬称略）

第2回筑波大学教材・指導法コンテスト(木村賞)報告

特別支援教育連携推進グループは、特別支援教育研究センターの流れを受け継ぎ、附属特別支援5校、人間系障害科学域と連携し、教材・指導法データベースの構築・運用を行っています。このデータベースは、広く外部へも公開しており、特別支援教育における教材・指導法の充実と普及に取り組んでいます。

2022年3月現在、附属特別支援学校から500点を超える教材教具が寄せられ、日本国内はもとより、海外からのアクセスもあり広く活用されてきています。

このデータベース事業をさらに充実していくための一環として、第2回『教材・指導法コンテスト』を開催しました。大学の障害科学域の先生方、附属学校教育局の先生方、5附属連絡会議の先生方と連携推進グループ教諭による第1次～第3次までの厳正な審査の結果、以下の3作品が優秀作品として選ばれましたので、ここにご報告させていただきます。



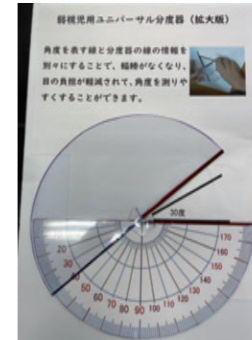
最優秀賞 (木村賞)

「へんしんキューブ」

附属桐が丘特別支援学校：金子栄生教諭

身近な素材を用いて作れること、手に取りやすく子どもが操作しやすいこと、学校種、障害種、教科の枠を超えて様々な学習に広く使えるというユニバーサルでインクルーシブな点が高く評価されました。

「(受賞の知らせを聞いて) 大変嬉しく思っております。教材の作成にあたっては、色々な実態の児童生徒に幅広く使用できるよう、軽量化、安定性、操作性に配慮し、障害があっても楽しく学習できるよう、ユニバーサルデザインを意識しました。学級の子どもに使ってもらえたからこそ、教材の意義があったと思っております。ゆっくりと発達する子供達が教材の必要性を自分に教えてくれるので、これからも子供達から学んでまいります。」

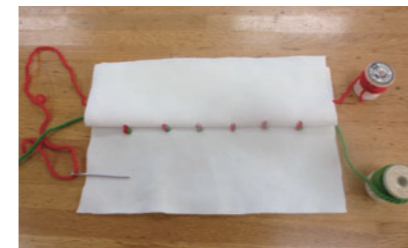


優秀賞

「ユニバーサル分度器」

附属視覚特別支援学校：山田毅教諭 (小学部代表)

通常の分度器では、角度を測るために2つの線を認知することが要求されるため、弱視児童生徒にとっては目の負担が大きいが、本教材は、要素を分けて、それぞれの情報を分離して見ることができるため、負荷がかかることなく角度を測ることができるという点や、本教材も、視覚障害教育だけではなく、障害種、学校種を越えて幅広い活用が期待できるという点が評価されての受賞となりました。「大変光栄に思っております。ありがとうございます。教材は独りよがりになりやすいことがありますが、今回の受賞により、私の教材に客観性があったことがわかり、自信につながりました。」



優秀賞

「ミシンの上糸と下糸の解説」

附属桐が丘特別支援学校：大石京子教諭

実際のミシンを扱う前に、ミシン縫いの構造を視覚的に分かりやすく理解するための教材で、糸の強弱を擬人化する説明方法でイメージを持たせるという指導法の部分も評価されました。「(受賞の知らせを聞いて) 思いがけないことで、恐縮しています。この教材は、家庭科の授業でミシン縫いの糸調子を学習する際に用いています。発想はだいぶ前になり、当時はボール紙と紐を用いた簡素なものでした。今回、受け持っている生徒がよりイメージしやすいように布を用い、ミシン糸の芯を利用するなど改良を加えると、子どもたちの関心をより引き付け、針や糸の動きに対する不安がなくなり、落ち着いてミシン縫いに取り組めるようになりました。基礎基本の学習は普遍的ですが、伝え方に少し工夫と変化を加えると、伝わりやすくなることを改めて実感した次第です。ありがとうございました。」



* * * * *

現在も教材・指導法データベースでは、附属学校で用いられている教材・指導法を募集しております。附属学校で開発された様々な教材や指導法を広く知っていただくために、今後も連携推進グループは、データベース事業に取り組んでまいります。

令和3年度 現職教員研修（専門性向上研修）について

筑波大学では、特別支援教育における指導法の専門的知識と実践力に優れた教員の養成を目的として、毎年、全国から現職教員研修生の受け入れを実施しております。本年度は2名の先生が1年間専門の領域について学びを深める長期研修に参加されました。



北海道小樽高等支援学校の小谷明日香です。「高等支援学校における生徒理解の在り方に関する研究」をテーマとして研修に取り組みました。研修では、附属久里浜（自閉症）と附属大塚（知的障害）での実践実習や、附属各校の先生方による講義・演習、大学の講義の聴講、就労支援機関の見学等を行いました。

コロナ禍の影響を受け、予定どおりにいかず悩むこともありました。グループの先生方から多くのご助言をいただき、様々な視点から研修を進めることができました。実践実習では、児童生徒との関わりや先生方の姿から、発達の段階に応じた関わりや、アセスメントの方法、生徒の主体的な学び

につながる指導方法の工夫などについて知見を深めることができました。研修における貴重な経験と研究の成果を現任校での実践に生かしていきたいと思っております。1年間ありがとうございました。



鳥取県立皆生養護学校の福島健介です。「特別支援学校（肢体不自由）における国語科の指導について」をテーマとして研修に取り組みました。

年間を通して、附属桐が丘（肢体不自由）での研修を行い、国語科の指導で授業実践や授業参観をさせていただきました。

研修の前半は施設併設学級で、知的教科の国語科で授業実践を行いました。どのように実態を捉え指導目標を設定するのかを考え、単元づくりについて理解を深めることができました。

研修の後半は、準ずる教育課程の国語科の授業参観を行いました。児童が自分の言葉で考え相手に伝えようとしてい

る姿や、児童の言葉を丁寧に受け止め称賛する先生の姿などに着目し、これまでの自らの実践を振り返ると同時に、これからの鳥取県での実践に生かすことができる学びが多くありました。

1年間、多くの学びの機会をいただきありがとうございました。

* * * * *

令和4年度からは1か月・3か月の指導力向上研修について、年度内での随時募集も開始いたします。ご関心のある先生は、当グループまでご連絡ください。

筑波大学社会貢献プロジェクト

「オンライン会議システムを活用した特別支援教育講座」

筑波大学特別支援教育連携推進グループは、「特別支援教育におけるオンライン会議システムを活用した指導力向上研修プログラムの開発と発信」として、昨年度と本年度の2年間、筑波大学社会貢献プロジェクトに採択されています。グループ員が講師として、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、自閉症に関する講義を担当しました。本プロジェクトは、講義中心の「個人コース」、講義・演習を合わせた「学校コース」を開設し、全国から133名の先生方に受講いただきました。

プロジェクトの特徴としては、各講座をステップ1から5までの5段階の構成としています。講義形式だけではなく、対話型の演習形式として、指導における諸課題や教材研究、指導プロセスの検証及び共有を行っています。またオンラインと並行して、実際に学校コースで受講いただいている先生方の学校にグループ員が訪問し、具体的な指導や支援について考えていくこともできます。昨年度は、緊急事態宣言等により学校訪問は中止となりましたが、本年度は関東圏及び中国地方の特別支援学校6校の訪問が叶いました。



ステップ3 「肢体不自由の指導の実際/アセスメント」講座
Google Jamboard を活用し、演習を実施している様子

■ステップ1（個人コース・学校コース対象）

日程	講座名	担当
7月20日(火)	聴覚障害の理解	山縣
7月21日(水)	知的障害の理解	厚谷
7月26日(月)	肢体不自由の理解	竹田
7月27日(火)	視覚障害の理解	佐藤
7月28日(水)	自閉症の理解	高尾

■ステップ2（学校コース対象）

具体的な実践について、ニーズに即したやり取りを行った

■ステップ3（個人コース・学校コース対象）

日程	講座名	担当
8月19日(木)	自閉症の指導の実際/アセスメント	高尾
8月20日(金)	視覚障害の指導の実際/アセスメント	佐藤
8月23日(月)	肢体不自由の指導の実際/アセスメント	竹田
8月30日(月)	聴覚障害の指導の実際/アセスメント	山縣
8月31日(火)	知的障害の指導の実際/アセスメント	厚谷/若井

■ステップ4（学校コース対象）

グループ教諭が学校に訪問し、授業や指導事例を通して指導や支援について理解を深める（オンライン実施を含む）

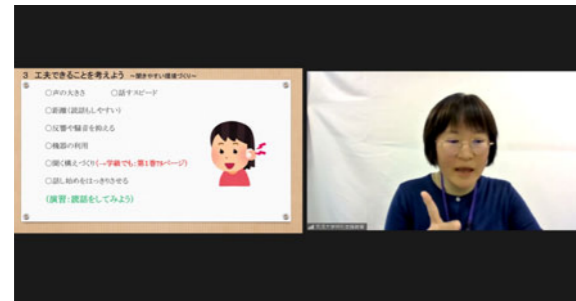
■ステップ5（学校コース対象）

授業実践場面に即した研修のまとめ

令和3年度筑波大学公開講座 「特別支援教育における子どもの見立てと教材・指導法の基礎」

活動報告

令和4年1月6日（木）に、オンラインで公開講座を開きました。本講座は、これまで対面で実施していましたが、コロナ禍において初めてオンラインで実施することになりました。教材の作り方や使い方など、オンラインでどのように受講者の皆さんに伝えたらよいか、全体の構成や流れを分かりやすくするにはどうしたらよいか、など考えながら準備を進めてきました。



これまで当グループでは「現職教員研修」の講義や全国の特別支援教育に携わる教師向けの「特別支援教育講座」等を、オンラインで実施し、伝え方を工夫してきました。そのノウハウを生かし、本講座ではスライドだけでなく、電子黒板（タッチパネル）や映像を使用する、実技やデモンストレーションを行う、リアルタイムに紙の教材をチャットで受講者に送信するなどの工夫を行いました。

また、書籍「授業を豊かにする筑波大学附属特別支援学校の教材知恵袋」教材編と自立活動編の2冊をテキストとして活用し、グループのデータベースを紹介しました。データベースや書籍に掲載されている5つの附属学校の多くの教材・指導法を通して、受講者の皆さんの学びを深めるようにし、講座終了後に、それぞれの学校等で日々の指導に活用していただけるようにしました。

講座のまとめの時間では、一人ずつ感想や意見を出していただき、また、アンケートを回収しました。その結果、講座の内容はおおむね良い評価であり、「今後の指導に生かしていきたい」、「（講義で用いた当グループの）教材指導法データベースや書籍の活用をしたい」といった意見が聞かれました。講座の中で体験や映像の活用が、分かりやすかったと好評でした。コロナ感染が拡大する中、オンラインで講座を行ったことに感謝される意見も多く聞かれました。

来年度もオンラインで開講の予定です。更に分かりやすい講座をつくっていただけるように努めていくと同時に、教材・指導法データベースも充実させていきたいと思っております。



令和3年度5附属連絡会議 情報交換会について

会議報告

5附属連絡会議は、附属特別支援学校5校の教員が年に数回集まり、様々なテーマで互いに学び合い得られたことをまとめる場です。本年度は「つなぐ、創り出す、～発信へ!～」をテーマに、計7回の会議をオンラインで実施しました。ここでは、夏休みから継続的に取組を進めた「障害種を越えた教材の活用」についてご紹介します。

特別支援教育連携推進グループは、多様な教育の場での学びを充実させることを目的として教材・指導法データベースの運営をしています。このデータベースから「障害種を越えて、他の特別支援学校でも広く活用できる」教材・指導法を、附属特別支援学校5校の教員とグループ員が夏休みに選定し、他校の教材を2学期以降の授業で活用した実践を報告しました。



附属大塚特別支援学校の「簡単ヘアゴムでビヨーンキャッチゲーム」は、ヘアゴムに紐を結び、2人で協力しながら紐を引っ張ってボールをキャッチするという教材です。相手の引っ張り方に応じて自分の紐の引っ張り方を調整する、タイミングを合わせて目的のカゴまでボールを運ぶ等、他者と協力することの要素が含まれています。

この教材を他の障害種で活用してみました。附属視覚特別支援学校では、紐に鈴をつけたり、ボールの種類や材質を替えたりする等、視覚以外の諸感覚を活用し楽しめるように工夫をしました。附属桐が丘特別支援学校では、児童が操作しやすいように、車いすから下りて床で活動する等、環境の工夫を行いました。

各障害種の専門的な視点から、1つの教材の特性を掘り下げることにより、汎用性の効果が分かり活用の新たな可能性を見出すことができました。また、教材の特性を整理する過程で、異なる視点や指導方法等に気づき得られ有意義な情報交換会となりました。各校の教員からは「同じ教材でも、実態に応じて色々な使い方ができると分かった。」「特別支援学校だけではなく、小・中学校等でも活用できるのではないか。」という感想もあがりました。

5附属連絡会議での活動の様子は、今後も「SNE-T」やグループの事業等で発信していきますので、ご期待ください。「教材・指導法データベース」へのアクセスも、お待ちしております。



<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/kdb/>

editorial Postscript

編 集 後 記

春らしい穏やかな陽気が感じられる中で、今回も多くの方の御協力を得ながら「SNE-T」(13号)が完成いたしました。デジタル版広報誌として新たな船出をしてから本号で5回の刊行を迎えることができました。多くの反響を頂いていることに、特別支援教育連携推進グループ員一同、心より感謝を申し上げます。

この2年間、様々に教育活動の変更を余儀なくされる中で、少しでもよりよい情報を発信していきたいと皆で力をあわせて製作に取り組んでまいりました。

新年度も、引き続き特別支援教育連携推進グループをどうぞよろしく願いいたします。 (竹田 恵)

今号の表紙は、私の所属校である附属大塚を撮影して作成しました。附属大塚の様々な風景の一部を切り取り、表紙を構成しています。この中に『ファイトのうた』の歌詞の一部を散りばめました。『ファイトのうた』は、附属大塚では校歌と並び、さまざまな機会でも歌われ、親しまれており、「第二の校歌」と言っても過言ではありません。この歌を作られたのは、本校の副校長を務められた須山弘先生です。子どもたちにも覚えやすいメロディや素朴で力強い歌詞の中に込められた、須山先生の子どもたちや本校に対する温かいお気持ちに溢れています。附属大塚は2年前には「還暦」を迎えました。この先もずっとこの歌が附属大塚で歌い継がれていくことを心から願ってやみません。 (厚谷秀宏)



SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット13号(通巻 第61号) 2022年3月22日発行
発行 / 編集 : 筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
電話 : 03-3942-6923・6937 FAX : 03-3942-6938
e-mail : snerc@human.tsukuba.ac.jp
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>

©2022 筑波大学特別支援教育連携推進グループ(本誌記事の無断転載を禁じます)